

粉河寺縁起と粉河寺式千手観音像

大河内 智 之

はじめに

一 粉河寺縁起の成立

二 縁起をまとう霊現像―粉河寺縁起に基づく本尊の図像化―

1 童男行者、大伴孔子古、鞆付帯と漢文縁起

2 紅袴、帳と和文縁起の在原業平説話

3 四臂の蓮華手と和文縁起の蓮華説話

三 粉河寺式千手観音像の作例

1 図像的特徴の一致が大きい作例

2 図像的特徴が一致しない作例

おわりに

はじめに

紀の川流域の中核寺院である粉河寺は、枕草子に「寺は壺坂。笠置。法輪。霊山は、釈迦仏の御住みかなるがあらはれなるなり。石山。粉河。志賀。」と名が上がる早くから都にも知られた観音霊場であり、西国三十三所の第三番札所として多くの参詣者を集める。

本堂に安置される本尊千手観音像は絶対の秘仏であるが、その姿を描いた仏画が複数確認でき、持物として鞆を執ったり肩に紅袴を掛けるなど、通常の千手観

音の図像とは異なる特徴を有している。筆者は和歌山県立博物館特別展「国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史」（会期…令和二年一〇月一七日～一月二三日）の開催に際して、これらの特徴が粉河寺の縁起に典拠を求められることについて指摘し概要を論じた^①。

本稿では先の概要を踏まえつつ再度この問題について検討することとし、粉河寺縁起成立の時期と背景についての新見解を示したのち、改めてその特殊な図像と粉河寺縁起の内容とを対照させて分析し、これを粉河寺式千手観音像と呼称することを提言する。その上で粉河寺式千手観音像の作例を集約して紹介し、さらにその特徴を明確にした上で、国宝・粉河寺縁起の千手観音図像との相違についても指摘して、特に国宝本の制作主体について若干の私見を述べることとした^②。

一 粉河寺縁起の成立

粉河寺縁起は粉河寺の本尊千手観音像の出現にまつわる奇瑞と、生身観音の霊験譚を、前段と後段の二つの物語から語り、末尾に堂舎施入の願主を示す内容となる。本稿を進める上での基本情報となるので、まず最初に、「粉河寺縁起」^③（以下本稿では「漢文縁起」と称す）の全文を確認し、あわせて従来明らかでなかった縁起の成立時期について検討し、新たな見解を提示したい。

粉河寺縁起

宝亀元年、草創紀伊国那賀郡粉河寺。故老伝云、先是同国同郡有一狩師。名曰大伴孔子古、畋獵為業、山林為栖。然間、点一幽谷定一踞木、夜々窺猪間、当左眼毗進。有光明赫奕之處、其程如大笠許。心中作怖、奇特尤切。即下踞木、漸行放光之處、隨行光去、還來如東。属現此相及三四夜。即点光地掃除草木、結構柴庵、心中發願、建立精舍、奉造仏像。不經幾程、有一童男行者。請暫寄宿孔子古之宅。則許令住。行者喜悅語家主曰、檀越生作何善根、若有心中所願者、吾当耶成。答曰、我有一願、放光之地、為造立仏像、而無仏師、未遂其願。行者云、我是仏工、当遂汝願。狩師云、我為法界衆生、兼又我息男船主、任奥州軍曹下向、為安穩帰郷、欲造仏像也。行者隨喜、相共行向草庵之地。行者示而云、我七日内可作仏、但中間莫來見。若造仏畢、吾往汝宅、当叩門戸、其時汝來可拜見。新仏約諾畢、仏工閉戸、檀越返宅。七日間致精誠、至第八日払暁、聞打戸參入拜見、千手觀音像、自然出現、更無仏師。於是檀主、悲喜相交、歡悅尤甚。永絶殺生、偏帰仏法。其後、河内国淡河郡馬馳市、有佐太夫不知其名者。有一愛子、久沈重病、医家失方、神明無驗之間、童男行者、來看父宅。談語之次、語子病事。行者云、試將加持。即誦千手陀羅尼。病子唱云、吾病已瘥、方用飲食。父母歡喜、則与飲食、速得氣力。行者請退。家主所有衣物、悉以布施。行者不肯受之、唯受納鞞付帶一筋。時佐太夫云、惠德至深、不知所謝、行者此誰人乎、示住所。答云、我住紀伊国那賀郡風市村粉河寺、若欲報謝者、可尋來。即辞退訖。其後家主、引率妻子眷屬等、行向彼国那賀郡、往々尋訪、僅得風市村、更無粉河寺。跡躡跡東西、適到一澗川、随流河水甚白、俄如流米粉。忽然得悟、即知此地。遂入林中、得一草堂。開戸無人、東西大方入夜無火、仏像不見。身心疲極、所持香花燈油等、置仏前机、暫間休息、人皆睡眠。漸及深更、所置燈油、自然火然、堂内赫奕、宛如昼日。驚起見之、金色千手觀音像安立。念住持來左右喚求、更以無人。漸奉見仏像、我先所施帶鞞之刀、持施無畏之手。則知前來□童男行者、是千手觀音之垂跡也。從爾以來、靈驗揭焉。於是、伊都郡淡田村寡婦富

久字大刀自、貴於觀音靈驗、運其住宅、改草庵為精舍。其後当郡名手村女人、字檜皮屋亦壞、已住屋施入札堂。自是以降、朝野帰心。此夷低頭、帰依者攘其稱炎根福、恭敬之輩、除病延命。困茲、都鄙道俗、多皆攀登、国内縑素、誰不參詣。

狩師大伴孔子古が靈地に仏像を安置することを發願し、現れた童男行者が七日で千手觀音を造像した後に姿を消したという前段については、まさしくその童男行者自身が觀音の化身で、かつ仏像に姿を変えたことを示唆する内容となる。そして河内国淡河郡馬馳市の佐大夫の子の病を、現れた童男行者が千手陀羅尼の功德で治癒した後段は、佐大夫が布施した鞞付帶（帶鞞之刀）を粉河の草庵にまつられた千手觀音像が手にしているという直接的な示唆により、粉河寺の本尊は、童男行者の姿に応現して人々を救済する觀音菩薩が、その身を化現させた生身觀音像であることを明示している。

従来、天喜二年（一〇五四）に仁範によって記された「粉河寺大率都婆建立縁起」^③（以下本稿では「大率都婆縁起」と称す）に記載される粉河寺縁起が最古本として評価され、漢文縁起もこれを元にするという見解が示されてきた。^④例えば「童行者」（大率都婆縁起）と「童男行者」（漢文縁起）、「我住紀伊国那賀郡風市杜云粉河所」（大率都婆縁起）と「我住紀伊国那賀郡風市村粉河寺」（漢文縁起）、「更无云粉河所」（大率都婆縁起）と「更無粉河寺」（漢文縁起）などについては後世の改変が及んでいるとみられ、前者がより古い表記であるといえるが、「大率都婆縁起」の本文がより修飾的かつ説明的である一方、「漢文縁起」が簡潔かつ正確である点などは、単純に後者を前者の本文をままとめなおしたものと捉えることも難しい。そもそも大率都婆縁起収載の粉河寺縁起自体が、仁範による加筆を受けている可能性も想定され、両史料の前後関係を考えるよりは、それぞれのテキストから共通の祖本を浮かび上がらせることがより重要となろう。

この祖本となる縁起が形成された時期についてこれまで明らかではなかった。しかし、縁起末尾に記される自らの住宅を布施して粉河寺の本堂とした、伊都

郡波田村の寡婦富久字大刀自に関する関連史料を見出すことができた。「平田福刀
自子家地充文案」(図1)を次に示す。

充行家地公驗事 案文

合肆枚 一枚本券文 一枚行文 地員式段佰步
二枚處分帳

在大和国葛下郡廿二条三里十八坪一段、東南角、

右、故伯父平田宿禰全妹丸得分地也、而賜福刀自子已了、

同郡廿四条三里廿五坪一段 (異筆「件坪三男処分了」)
廿六坪二百步

右、故親父賜地公驗也、

右、件家地公驗、依有教、甥同姓高雄、永年度行如件、

延喜十一年三月廿三日 姑平田宿禰 福刀自子

件公驗度給見、甥平田 常範

福刀自子居住紀伊国伊都郡判

檢校正六位上文伊美吉 今雄 所由文 新雄

郡老□六位下六人部連 文 興國

郡老大領外從八位上文伊美吉 文 全邦

擬大領從七位上文伊美吉 主帳外大初位且来直

擬大領從八位上六人部連

□□□從八位上六人部連 忠雄

□□□從八位上文伊美吉

延喜十一年(九一一)に平田福刀自子が大和国葛下郡の土地を甥に充てがう内
容で、平田氏は、大和から紀の川流域にかけて勢力を有した坂上氏系の渡来系氏
族であった。本史料中には「福刀自子居住紀伊国伊都郡判」ともあるので、その
居住地も縁起の「波田村」(伊都郡内)と齟齬がなく、「漢文縁起」の「富久字大
刀自」と読みも概ね一致しており、同一人物である可能性が極めて高い。

縁起の「富久字大刀自」のくだりは、観音の靈驗譚に続く伽藍形成の文脈で堂

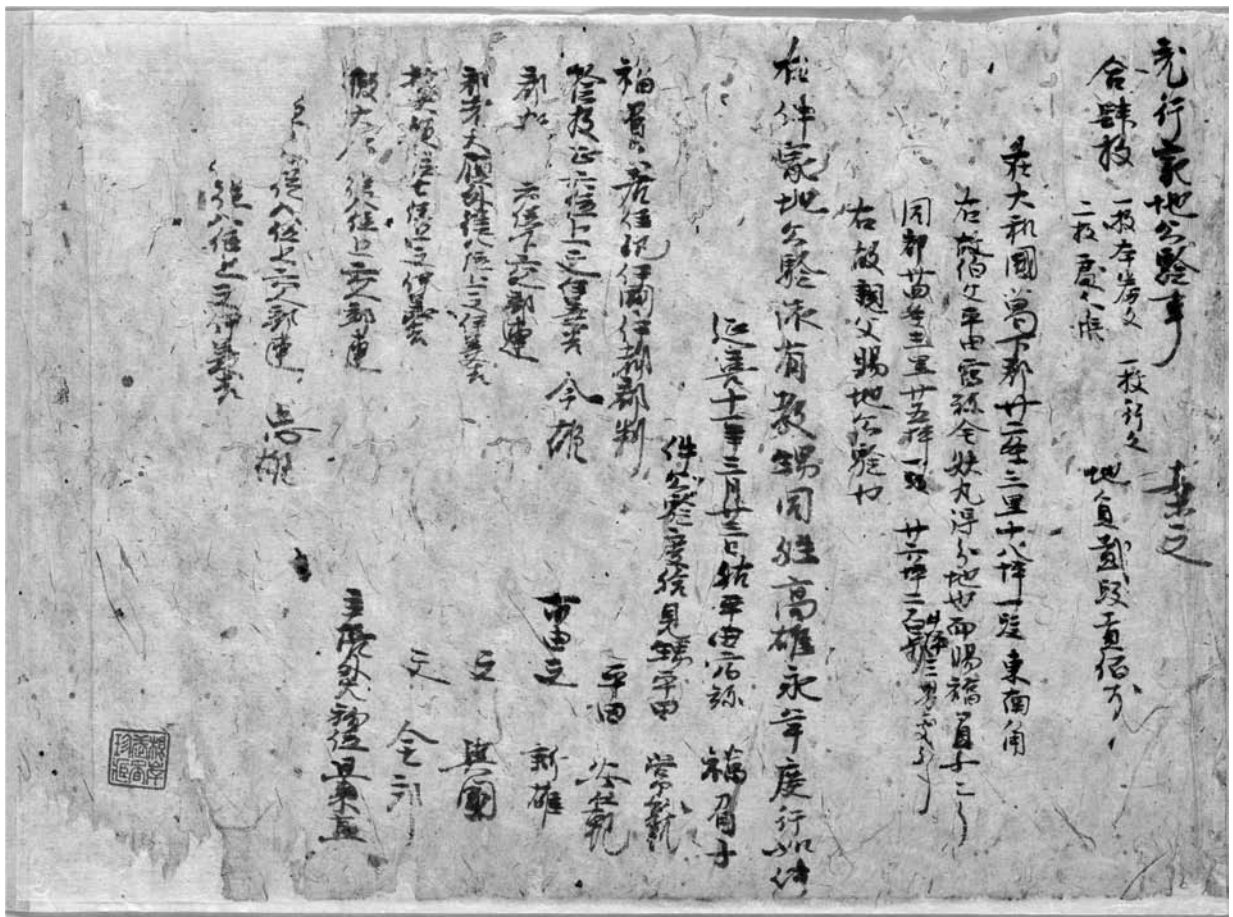


図1 平田福刀自子家地充文案 国立国会図書館蔵

舎とその寄附者が示されるもので、そこには縁起と資材帳に相当する要素がある。実際にこの平田宿禰福刀自子（富久字大刀自）が粉河寺に堂舎を寄進したかどうかについては不明ではあるが、地域の有力豪族でありかつ土地の相続者であって経済力を有していたことを踏まえればその蓋然性は高いものといえる。このことにより粉河寺縁起本文が成立した上限については、平田福刀自子在世時の一〇世紀初頭ごろであるものと理解される。

正智院所蔵の正暦五年（九九四）「太政官符案」⁷には、永延二年（九八八）の寺解に記載された旧記を引用して「此地白粉流水、時々現神変之相、黄金放光、屢々示希有之瑞、点処而発願、結此木而構庵、未及人間之力巧、顕紫磨金之尊像、以之称粉河寺、以之号自然仏、于時大伴連孔子古、奉為公家、以去宝龜年中奉造也」と、かなり要約されてはいるものの縁起の内容が示される。この「旧記」が粉河寺縁起の祖本と共通するものと見られ、すでに一〇世紀後半には縁起は国司へ進達する文書にも用いられていることがわかる。

このころの粉河寺の状況を示すものとして、延長五年（九二七）に完成した『延喜式』主税上諸国本稻条に「紀伊国正税・公廩各十七万五千束、国分寺料二万束、金剛峯寺料五千六百十六束、同寺灯分料并仏聖料二千八百束、粉河寺料四百束、文殊会料二千束、修理池溝料三万束、救急料六万束」とあり、一〇世紀初頭には、粉河寺は紀伊国分寺や金剛峯寺と並んで国府からの財政支援を受け、定額寺院化していたことが知られる。先に見た縁起成立の上限とも符号する。こうした状況下において、縁起及び資材帳の整備と進官の必要が生じて、粉河寺縁起の祖本が形成された可能性がまず考えられる。⁸

もちろん、現今の粉河寺縁起（「漢文縁起」）は、文書様式上、資材帳たり得ない。ただ、大伴孔子古による柴庵の建立、本尊像の自然出現とその安置という縁起前半部分も、縁起末尾の堂舎寄進の情報とともに、資材帳と接続する要素は含まれているともいえる。この点について「大率都婆縁起」には「尋其流来縁起、御寺別当湛誓時、焼失之云々」とあって、天喜二年（一〇五四）仁範起草の際において別当湛誓の時に流来縁起が焼失したとの伝えがあったことを記す。従来

注目されてこなかったが、流来とは流記、すなわち資材帳のことであろう。このように捉えればこれは、流記（資材帳）及び縁起の存在を示している情報とも読み取れる。その焼失の時期については、粉河観音の靈験を三十三段に示した「粉河寺縁起」（以下「和文縁起」と記す）の「別当湛誓愁申寺家焼亡得夢想第五」には承平五年（九三五）八月一三日のこととしている。この年紀の信憑性を他の史料で担保しえないものの、いづれにしても流記（資材帳）の存在が寺内では早い段階で伝承されていることを確認しておきたい。

同じ時期に資材帳が作成されている事例としては、承平七年（九三七）命蓮によつて記された「信貴山寺資材宝物帳」（『平安遺文』四九〇四号）や天曆七年（九五三）作成の「近長谷寺資材帳」（『平安遺文』二六五号）がある。このうち「信貴山寺資材宝物帳」については、列記された資材宝物に続く本文に「右、命蓮、以寛平年中、未弁叔麦、幼稚之程、參登此山、但所有方丈円同一字、安置毘沙門一軀、爰愚私造閻室、限十二年、山蟄勤修之間、更無人音、仏神有感、彼此同法出来、專住於此山、更無他行、自然臻于六十有余、其間奉造本堂四面庇、自余宝殿尊像、又宝物坊舎等、所造儲也」とあって、本尊靈験譚は含まれないものの命蓮の登山から伽藍整備にいたる縁起が示され、鎮守山王・勸請諸神にその護持を願う内容となる。律令制的な資材帳の制度が十全な形で機能しなくなつてからの文書であり、政府への提出のためではなく、寺内置文としての目録であると評価される。¹⁰

粉河寺の流記と縁起が進官用のものであったか、置文的なものであったか、なお断定は難しいが、一〇世紀初めごろに形成された「流来縁起」を祖本として、それを組み合わせて「自然仏」たる本尊の靈験譚を、資材帳の要素を含んでまとめたものが「粉河寺縁起」であったと考えるべきである。

二 縁起をまとう霊現像―粉河寺縁起に基づく本尊の画像化―

1 童男行者、大伴孔子古、鞆付帯と漢文縁起

本稿の主題に入る。粉河寺に所蔵される千手観音二十八部衆像(図2)は、絹本着色として絹継ぎはなく、縦一二九・五cm、横五九・八cmを計る。画面向かって右側に上部から下部へと波上に欠損があり、現状補絹が施されている。欠損は上部が大きく下部が小さいので、巻いた状態で表面より内部へと損傷が生じたものである。

観音の住まう補陀落山の景観中に、中央に幅広の舟形光背を背負って蓮台に立つ千手観音、その両脇に眷属の二十八部衆及び風神・雷神が並ぶ。一見して本図を他の千手観音二十八部衆像と区別するのが、観音の足下、向かって右に幹の曲がった木の根元に座る、みずらを結って袍と袈裟をまとい右手に錫杖、左手に数珠を執った童子形の行者と、左に束帯姿で笏を執り牀座に座る貴族男性である。そして画面最上部に帳が描かれていることも珍しい。

さらに中尊千手観音像を詳細に見ると(図3)、そこにはいくつかの特殊な画像が確認される。まず脇手のうち右側最下段の施無畏手には、手首に掛けた帯に、黒い棒状のものがさがっている。そして最も目立つのは、左肩に、腰下までを覆う鮮やかな紅色の衣が掛けられていることで、さらには胸前で蓮華を執る脇手が、一般的な千手観音画像では二臂であるところ四臂表されているのも印象的である。中尊肉身部は金泥として、輪郭は朱線で描き起こし、装身具は金泥、着衣部には精緻な截金(糸帛に斜格子文、裾は表の地文様が疋繋ぎ文で縁は唐草文、裏の地文様は麻葉繋ぎ文で縁は線条)を施す。諸眷属・従者は彩色主体として髪部や鎧、着衣、装身具等に金泥及び截金を施して、中尊も含め細部まで入念の作となる。およそ南北朝時代頃の画風を示しているが、二十八部衆の各像面貌をみるとやや緊張を緩めた印象もあり、やや幅をもたせて、南北朝時代―室町時代前期、一四世紀後半ごろの制作とみておきたい。

本図のうち、観音足下の童子形行者像(図4)については、山本陽子氏の研究により粉河観音の化身たる童男行者の姿であることが明らかとなっている¹⁾。「大率都婆縁起」に「根本精舍西南去二町許、有勝地。古老伝云、此大悲観音最初出現之地也。又悦云、童行者経行之所也。其地傍有一霊木、鈎樟也。雖経三百余歳之星霜、其根茎不長大、其枝条不増減。其樹下有一霊地。方三尺許。雖送数百年之春秋、不生更草木、不汗於塵土。奇異神妙、霊験掲焉。古老云々、是鈎樟、此行者之立杖所生付也云々。然為淤泥所繞、崇勝地无人、為荆棘所覆、悲陵遲有歎。」とあるように「鈎樟」の根元に座る姿も縁起に由来する。なお、この鈎樟(鈎樟)については、同文中に「鈎樟」とも記され、ともにクロモジをあらわすが、大木とはならず、幹もうねらない。樹種があいまいとなった後、「鈎」字からの類推により幹の曲がった木という画像が形成された可能性がある。

貴族男性像(図5)については、縁起に登場する人物としては前半の大伴孔子古、後半の佐大夫が候補となる。図像的には特段の特徴を有していないが、佐大夫が「不知其名」という人物であることを考えれば、正暦五年(九九四)の太政官符案でもすでに創建の壇主として名の上がる大伴孔子古がふさわしい。獵師姿ではないことについても、その一族が別当を勤めてきた寺史に即して、ふさわしい姿へと理想化が及んでいるものと判断される。

中尊千手観音の画像のうち、右脇手最下段、本来は持物を執らない施無畏手の手首に掛けた帯から下がった黒い棒(図6)についても漢文縁起との相関が明確である。漢文縁起後段の、子の病を千手陀羅尼の威力で癒やした童男行者に佐大夫が差し出し受け取った「鞆付帯一筋」が、粉河の草堂に安置される千手観音を拝見した際に「我先所施鞆之刀、持施無畏之手」と施無畏手に持っているのを見つけた、その鞆付帯(鞆鞆之刀)であることが明らかである。帯、鞆、そして施無畏手と正確に画像化していて、いわば縁起が儀軌として機能しているといえる。粉河寺の根本の縁起に現れる粉河観音の霊験を象徴的に示す、最も重要な持物であるといえる。

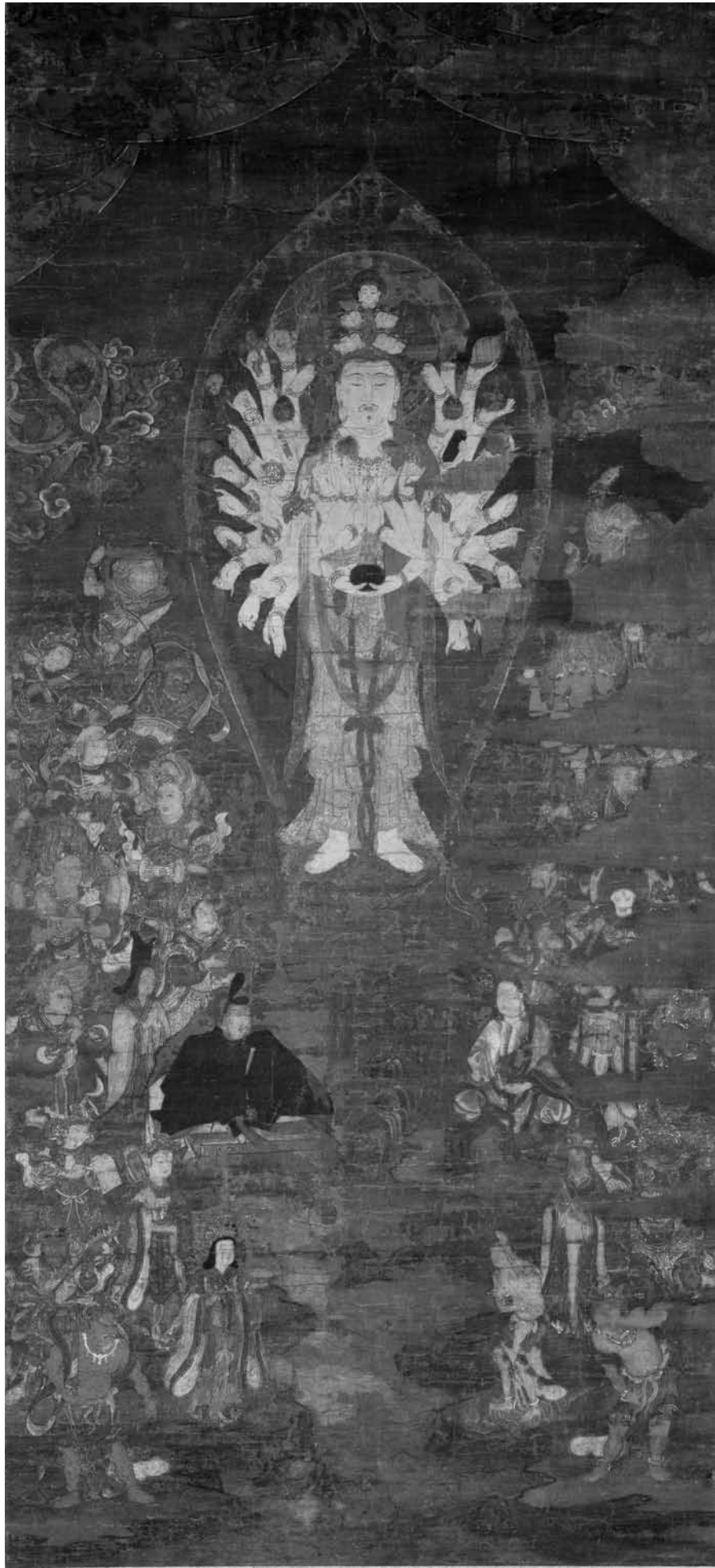


图2 千手观音二十八部众像 粉河寺藏



图3 千手观音像（千手观音二十八部众像 粉河寺藏）



図5 大伴孔子古像
(千手観音二十八部衆像 粉河寺蔵)



図4 童男行者像
(千手観音二十八部衆像 粉河寺蔵)

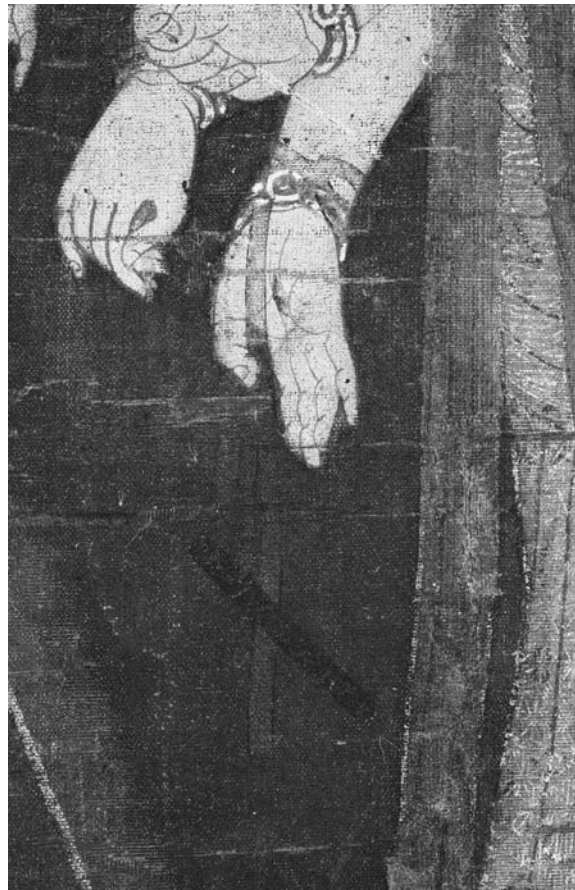


図6 施無畏手の鞘付帯
(千手観音二十八部衆像 粉河寺蔵)

2 紅袴、帳と和文縁起の在原業平説話

次に、左肩から掛けられた印象的な紅色の衣について検討する。この衣については、従来国宝・粉河寺縁起に描かれる、河内国讃良郡の長者娘（「漢文縁起」の河内国渋川郡馬馳市佐大夫愛子から改編）を治癒した際に、娘が童男行者に差し出し、のち粉河の千手観音像の手に掛かっていた紅袴と理解されることが多かった^⑩。国宝絵巻の詞書では「さけさやひとつくれな□」とあって詞は欠落するが、画中には紅の袴が右脇手半ばあたりに象徴的に掛けられているのを確認できる。しかし注意が必要なのは、図像としてみた場合、紅の衣を左肩から身に掛けている図像（図7）と、右脇手の外側に袴をぶら下げている図像（図8）は、全く異なるものであるということである。例えば絵巻では鞆付帯（国宝絵巻詞書では「提鞆」とする）も左手最下段の絹索手に持たされており、詞書に「施無畏のお手」と記すにも関わらず、その約束事にも無頓着である。両者は似て非なる図像といえよう。

このように紅色の衣の図像は、国宝・粉河寺縁起の千手観音像から影響を受けた痕跡はないといえるが、ではこの肩に掛けた紅の衣の図像はいかにして成立したのであろうか。和文縁起の第三段「在原業平朝臣北方感得上味酒菓第三」に関連する内容が確認できるので全文を示す。

在原業平朝臣北方感得上味酒菓第三

業平朝臣の右近少将たりし時、殿上人相議して珍物を調て主上に献ずることあり。少将家貧にして営むべき力なし。山林の素意を遂んと思ひて、今一度龍顔をも拝せんがために参内せられけり。北方少年より毎日に普門品三十三巻を讀に、今日の所作に当て涙に咽て居せり。靈き童の立文に具して風菓を持て来れるあり。人間の味にあらず。由緒を問に、紀伊国粉河寺の御使なりとぞ答ける。喜悅に堪ず、紅袴を使者に授くるに童不肯受。北方誣て曰く、人の志をば不失ものなり、肩に打懸つ。翌日に少将捧此風菓て天皇に上つる。



図7 千手観音二十八部衆像（部分） 粉河寺蔵



図8 粉河寺縁起（部分） 粉河寺蔵

叡感殊に甚し。其後四月上旬に少将北方と相共に当寺に参詣す。観音を拝見し奉るへきよし別当恩賀に触られければ、此本尊をは奇瑞なき人は拝みたてまつらずといふに、御帳のうちより異香忽に薫ず。恩賀感伏して御帳を褰に、観音の御肩に紅袴を懸おはします。北方驚て曰く、此袴は先に童に与し物なり。少将恠色なり。北方駭すらく、業平と書れたるよし二字を晦跡せん後の信物と思て袴の腰に入べき。即搜り得たり。見聞の人不思議の心をなさずといふことなし。清和の御時の貞観六年の夏事なり。

在原業平が主上に献上する珍物を用意できずに困っていた際、やってきた神秘的な童が持参した菓子はこの世のものとは思われない味であった。聞くと紀伊国粉河寺からの使いという。業平妻の北の方は喜び、使者に紅の袴を授けようとしたが受け取らないので、気持ちなので受けとってほしいとその肩にうち掛けた。菓子は天皇にさしあげ感動もひとしおであった。その後業平と北の方が粉河寺に参詣して、観音を拝見させてほしいと別当恩賀に尋ねると、奇瑞のない人は見る事ができないと言うやいなや帳の中からよい香りがただよったので、驚いて帳を開けてみたところ、観音の肩に紅袴が掛かっていた。北の方が袴に入れていた業平と書いた紙を見つけた、とするものである。

本図の図像は、まさしく肩にうち掛けた紅色の衣(袴)であり、肩に掛けたと明記する業平説話の内容と明瞭に重なっていることが分かる。この図像形成にあたっては「和文縁起」が典拠となったものと判断される¹³⁾。

さらに本図の画面上方に描かれた巻き上げられた帳(図9)についても、この業平説話との強い関連性を指摘できる。突然立ちこめた薫香のなか、別当恩賀が帳を開いてみると、北の方が童子の肩に掛けた紅袴が観音像の肩にそのまま掛かっていたという場面展開は劇的なもので、粉河観音が化身して現れ人々を確かに救済してくれる存在であることをアピールする上で、重要な役割を果たしている道具立てといえる。そもそも画面上部に帳を描くのは神や貴人(特に皇族)に限られており、その点でも本像の事例は特殊なものといえ、これもまた縁起に基



図9 帳(千手観音二十八部衆像 粉河寺蔵)

づく凶像と判断してよいものと思われる¹⁴。足利尊氏やその母上杉清子、足利義持、義教が粉河寺に帳を奉納しているが、こうした布施行為も縁起の靈験譚を背景にしている可能性があるろう。

「粉河寺旧記」¹⁵に収載される、元和年間（一六一五〜二四）に行われた什物改の際に提出された御池坊什物のなかに「御真影 中将業平之画」があつて、その由緒品が伝承されているように、粉河寺では在原業平という存在が重要視されてきた。この業平伝承のあり方について検討する上で、現在本堂厨子内に安置されるお前立像に注目したい。

この秘仏の千手観音立像は、寄木造、玉眼を嵌入して古色を呈するとの猪川和子氏による報告があり、同書掲載の写真をみると左肩には実際の布で紅袴を表して掛けていることが分かる。明治二十一年（一八八八）に宮内省に設置された臨時全国宝物取調局による鑑査の結果をまとめた「和歌山県宝物精細簿」（東京国立博物館蔵）によれば像高二尺八寸（約八四cm）を計り、二十八部衆及び風神・雷神像（本堂所在、享保五〜六年、仏師法橋友学康林作）とともに、三等という高い評価を受けている。この臨時全国宝物取調局の調査時のエピソードの中に重要な記録があるので、確認しておきたい。

和歌山県における宝物鑑査時の状況については、明治二十一年五月一日から二三日まで、和歌山市から高野山にかけて行われた鑑査を随行記者が『日出新聞』¹⁶に詳報している。五月一六日、一七日の粉河寺のようすを次に示す。

此日根来に着する頃より雨降り出て一行は頗る困難を極めたるが、午后一時過ぎ同寺を発し、粉河寺に着し同寺に陳列の什宝を点検す。然るに茲に一奇話ありと云ふは、凶書頭等今回の巡覧は如何なる性質のものなりと心得たるにや、粉川村戸長役場は数日前より粉川寺の大門入口の柱に幟の如き大なる紙へ「美術品鑑定を請はんとするものは来る十六日十禅院（陳列場に充てし院）に持参すべし」と筆太く書いて張り付けしことなれば種々の物品を持ち寄り、役行者の穿ちし下駄や大磯の虎（虎は十郎没後尼となり紀州に來りた

る由）の携へし笥の如き迄取り揃へ、其癖名品は至て少し。今其中よりまづ参観人の目に留りしものを挙げば、沈南蘋の花鳥人物二幅、宋朝の置物（犬の形）、獅子の香炉、曾我十郎の太刀、西金居士の十六羅漢像、古代大壺、粉川寺の古図、五大尊像、在原業平筆と云ふ所の千手観音、役行者の像、鎌足公の像、白芝山筆の虎等なるが、右の外優等の評ありしは定家卿の端書、鳥羽僧正の画きし粉川寺の縁起（書画せし人は確と其人なるや否は知らず）にて、此れは天正の兵燹に罹り、上下を焼きたるを綴り合せて一卷となしたるものなり。同夜は一行の人々同寺内十禅院に宿し（中には粉川村旅籠屋に泊せしもあり）、翌十七日早朝粉川寺の秘仏観音を開帳一拝せしが、古色黝然として年代は余程経過せしものなるべきも作は余り精巧とは云ふべからず。其像は千手観音にして肩に赤き裂れ地を掛たり。是れは如何なるものなりやを尋ねれば、右は在原業平が信向せし観音にて彼の裂れ地は業平の着したる衣の一片なりと云へり。此粉川寺の観音は数百年來開帳せざるものとかにて、此の開帳の事を聞き、同地のもは観音の祟りに由り此の里に火事はなきやなど気遣ふものありとは愚の至りと謂うべし。

この時の鑑査では、紀三井寺や金剛峯寺の金堂・御影堂も含めて秘仏を開帳させており、粉河寺でも数百年ぶりの開帳となった。千手観音の肩には赤い裂が掛かっていて、それを問われた寺僧は、在原業平が信仰する観音像で、裂も業平の着た衣であると答えている。この肩に掛かる紅袴が在原業平由縁のものであることが、明治時代まで脈々と受け継がれていたことが分かる。

このように確認すると、先に結論づけた紅袴凶像の典拠が「和文縁起」の在原業平譚にあることは疑いないといえよう。

3 四臂の蓮華手と和文縁起の蓮華説話

最後に、通常は胸前に二臂を掲げる蓮華手が、本像では四臂掲げている（図10）

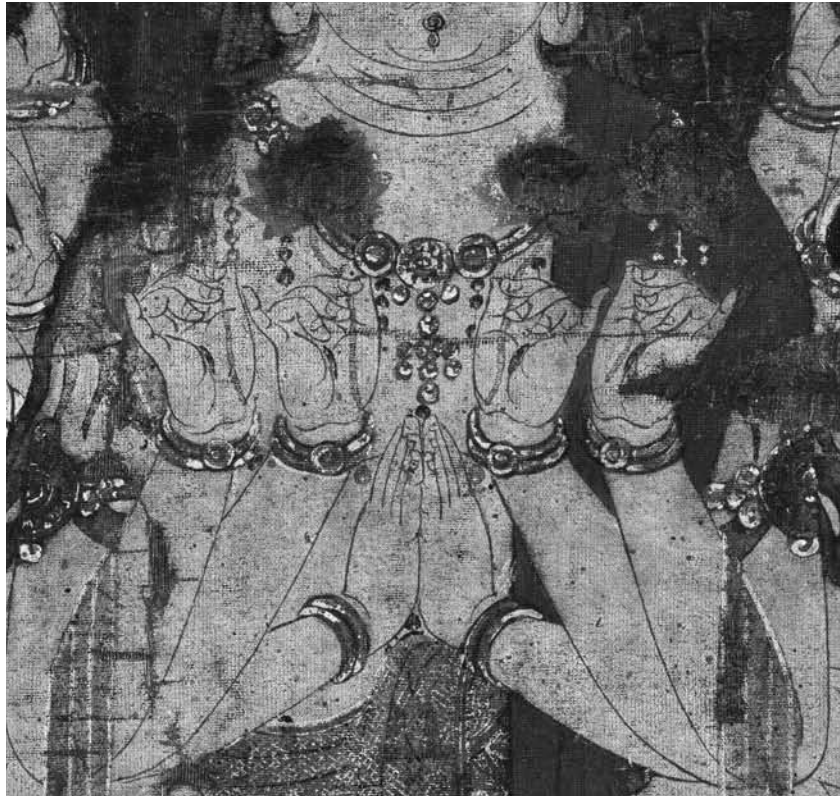


図10 四臂の蓮華手（千手観音二十八部衆像 粉河寺蔵）

ことについて検討しておきたい。

千手観音の脇手（大手）表現について、絵画と彫刻では傾向が異なり、彫刻では胸前の合掌手と腹前の宝鉢手のみをあらわす事例が圧倒的に多いが、絵画の場合にはこれに二臂の蓮華手を胸前に掲げる事例が一般的で、まれにさらに二臂を胸前に掲げる図像が見られる。例えば奈良国立博物館所蔵の千手観音像（平安時代・重要文化財）や愛知県護国院の千手観音二十八部衆像（鎌倉時代・重要文化財）などで、前者では追加の二臂には指を捻じめるのみで持物を持たせておらず、後者はその手に錫杖と宝戟を持たせている。本像の胸前の手（合掌手をあわせて六臂）の配置自体は、こうした先行する図像と共通したものである。

『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』（千手経）には千手観音の四〇手の印相・持物が説かれ、その中には白蓮華手、青蓮華手、紫蓮華手、紅蓮華手が含まれ、そもそも千手観音は蓮華を四枝持つ。ただし絵画ではその配置は胸前に二臂と、左右に広がる脇手の中に二臂とするもので、本像のように胸前に四臂を配置する事例は他に知られず、意図的な図像変更があったとみるべきであろう。現状の蓮華の色は、中央の二臂の分が赤、向かって右が白か黄とみられ、向かって左は画絹が荒れて判断が難しいが群青か紫であったであろうか。

こうした図像変更の根拠はいかなるものであっただろうか。「和文縁起」中には粉河観音と蓮華を結びつける靈験譚として、「比丘尼青蓮拝見金色蓮花第十八」と「藤原奉成現前得靈菓第廿二」があるので次に示す。

比丘尼青蓮拝見金色蓮花 第十八

青蓮は入道大相国清盛公の家の侍女なり。久安の比始て当寺に参詣す。諸院宮を勧申て宝幢幡蓋を飭整、善男善女を相誘て鐘磬仏具を鑄出す。鳥羽法皇御所持の大般若経を申給て安置し奉る。寺において勲功ある人なり。爰に観音の御体を拝したてまつらんといふ願あり七日を限りて祈請するに、夢中に御堂の内陣より貴女の御形を現す。尼の申さく、現世の栄花は望にあらず、来世の得脱を欣ぶところなり、変作は本意にあらず。又七日を歴に幻の中に

内陣より金色未敷の蓮花を指出す。是我体なりといふ御音あり。異香衣に染けるとぞ。

藤原奉成現前得靈藥 第廿二

奉成は、大和国佐保の住人なり。笠置の解脱上人の勸の千日千反の観音の宝号を念す。生年十一歳より当国池田庄に移住す。当寺と境を交て殊に信仰の思ひある故に、彼宝号三年を終といへども猶無怠し。安貞二年五月上旬重病身を逼て半死半生す。同月廿一日より腹中脹満して苦痛難堪し。只是観音の名号を咽の底に称念す。六月六日の丑時に夢想あり。病床の枕に有音云、此藥を服すべし。両手を捧て受畢ぬ。歸去御背を拝見するに薄墨染の衣の雨に湿て斑なるを着給へる老僧なり。北をさして去ぬ。心中に思惟すらく、粉河寺の観音の授験なり。驚てみれば紙に裹める物あり。十余粒の藥なり。大さ小豆のごとし。色は麻子に似たり。水に磨和して服するに重病主愈て身体平復しぬ。男女声を挙て感泣す。但一粒を遣さ、る事を悔悲む。爰に明朝に不慮に一粒を求得たり。永く髮中に納て、暫も身を放ことなし。播磨の書写山の住僧貞舜と云もの、去天福二年二月十二日に、当寺に參す。此事を伝聞て隨喜に不堪、奉成か所に行向ふて拝見するに、最小の未敷の青蓮花の茎の長三分許なる藥の中より出生して、種いさ、かに折たり。数日を歴て此花漸聞く。遠近の輩手をさ、へ上下の目を驚す。末代の不思議なるへし。洛中に風聞して或貴所より奉迎らる。遂に不返給。奉成が田地の御下文を賜けり。奉成出家して今に現在せり。後聞く、天福二年六月廿六日未の時に奈良故京の辺り南野田の人家にして此蓮花を拝見し奉つる事あり。衆中に十歳計なる小童の曰、蓮花より糸出給ふと。傍に壮年の女あり、同く此由を称す。満座の人共兩人の詞に驚て近寄て見之に、長さ七八寸計の、末は大きく本は細くして普通の藕糸無相違し。風に隨て簾に吹付たり、花の姿た微小にして頗似造成たり。此糸を見及んで諸人信伏せすと云事なし。其糸はあみた仏像の御手に卷付て、野田の堂宇に留奉る。残は蓮花に付て御坐せり。

「比丘尼青蓮拝見金色蓮花第十八」については、粉河寺に莊嚴具や梵音具、大般若經を勧進して安置した平清盛侍女青蓮が本尊像を拝みたいと望んだところ、夢中に貴族女性の姿で顕れ、また内陣から金色未敷の蓮華が差し出されて、これが観音の体であると声が出た、と語る。

「藤原奉成現前得靈藥第廿二」については、池田庄に住む藤原奉成が重病となり観音名号を唱えると、夢に老僧があらわれ藥を差し出した。雨に濡れて斑となった薄墨染めの姿で、粉河観音の靈験を授かったと思つた。目覚めると藥が一〇粒あり飲むと平癒した。残さず飲んでしまったことを悔いると翌朝もう一粒を得た。天福二年(二三四)、書写山僧貞舜がこの一粒の藥を拝見すると、そこから青蓮華が伸びて花が開いた。このことが洛中に聞こえ、ある貴所に渡り帰つてこなかった。奉成は出家し今も生きており、聞くところによると、奈良でこの蓮華を見ることがあり、蓮糸がでて、野田の堂宇の阿弥陀如来像の手とつながっていた、というエピソードを語る。

この二つの靈験譚において、直接持蓮華の四臂を胸前に集める凶像につながる文言は得られない。またどちらも未敷蓮華とし、凶像とも厳密には一致しない。ただし、青蓮の話については帳の中から金色の蓮華が差し出され、それが仏体と同一であるとの「御音」(粉河観音の声)を得たという象徴的な内容であり、藤原泰奉の話では重病から回復させた藥から青蓮が生じたと言語するもので、この二話の蓮華説話が示すのは、粉河観音の靈験が蓮華の形をなして人々の前に顕現するという奇瑞が繰り返して語られていたということであろう。

ここでは粉河寺式手観音像においては蓮華手を四臂あらわす凶像の特徴を有している事実を指摘し、粉河観音と蓮華が結びつく言説があることを提示して、それが粉河観音の靈験を強調するものとして表された可能性を想定することにとどめておきたい。

三 粉河寺式千手観音像の作例

1 図像的特徴の一致が大きい作例

前章では、粉河寺所蔵の千手観音二十八部衆像（千手観音二十八部衆及び童男行者・大伴孔子古像。以下便宜的に粉河寺A本と記す）の図像分析を行い、次の特徴を見出した。

- i 脇侍として童男行者・大伴孔子古を付随する。
- ii 施無畏手に鞆付帯を執る。
- iii 左肩から紅袴を掛ける。
- iv 画面上部に帳をあらわす。
- v 胸前に四臂の蓮華手をあらわす。

それぞれ縁起に根拠のある粉河観音の靈験を図化したもので（vについてはその可能性）、他の靈験像とは明確に異なるものであり、これらの特徴を示す千手観音像については粉河寺式千手観音像と呼称することを提唱したい。本節では、現時点で把握している粉河寺式千手観音像の事例について紹介し、その特徴をさらに明確にしておきたい。

① 阿弥陀三尊千手観音及び不動明王像 長谷寺（神奈川県鎌倉市）蔵（図11）

絹本着色、絹継ぎはなく、縦一一五・二cm、横六一・五cmを計る。画絹の損傷が多く、薫染による黒化が進む。画面の上段に來迎する阿弥陀三尊像を描き、下段左下には不動明王二童子像、そして右下に千手観音と童男行者・大伴孔子古の三体からなる粉河観音を配置する他に類例のない一幅である。

粉河観音を表した部分について、千手観音像は舟形光背を背負って、鞆付帯を施無畏手に執り、紅袴を左肩に掛け、右下に錫杖を執って鈎棒に座る童男行者、左下に束帯姿で笏を執り座った大伴孔子古を描いて、その間には大香炉を置いてある。帳を描かないのは上方に阿弥陀來迎図が配される構図に基づく可能性があ

るが、四臂蓮華手は見られないこと、宝鉢手を表さない点で、粉河寺A本との図像上の相違がある。

本図を紹介した林温氏は、上段の阿弥陀三尊、下段左側の不動明王と粉河観音が組み合わされていることから、観音信仰と、聖による阿弥陀信仰、そして修験の要素が混在しており、粉河寺の本寺三井寺も関与して、その信仰圏の中で制作されたと指摘している¹⁹。鎌倉時代後期、一四世紀前半の制作と想定され、現在のところ粉河観音を描いた作例として最も古いもの一つであり、粉河観音図像の成立段階を考える上で重要である。

現在神奈川県鎌倉市の長谷寺に所蔵され、外箱蓋表には「阿弥陀如来／十一面観世音／不動明王／豊後国某社本地仏」とあるものの内容には疑義があり、本来の伝来については不明である。

② 千手観音及び童男行者・大伴孔子古像 個人蔵（図12）

絹本着色、絹継ぎはなく、本紙の縦一〇八・四cm、横四八・四cmを計る。画絹の損傷が大きく、過去の修理の際に画面周囲が切り詰められたとみられる。

舟形光背を背負い、框上の蓮華座に立つ千手観音像は、胸前に蓮華手を四臂あらわして、施無畏手に鞆付帯を執り、脇手の配置と持物の全てが粉河寺A本と共通する。左肩には紅袴を掛ける。観音足下には向かって右に童男行者を配するが、鈎棒は省略される。それと向き合って束帯姿で把笏した大伴孔子古を配し、その間に香炉をあらわす。香炉は長谷寺本にはみられたが、粉河寺A本にはみられない。画面上部に赤い帳を描く。

これまで未紹介の作例で、中尊肉身部は金泥として、輪郭は朱線で描き起こし、装身具に金箔、着衣部に精緻な截金（条帛）に菱繋ぎ文、斜格子文、立涌文、裙は表の地文様が繋ぎ文に団花文を散らして縁は唐草文、裏の地文様は亀甲繋ぎ文、腰帯の地文様は麻葉繋ぎ文として縁は線条）を施す。童男行者は着衣の輪郭を金泥で描き起こして聖性を強調する。修理時の補筆も散見されるが、南北朝時代、一四世紀の制作とみられる。裏書や箱書等、伝来に関する情報は得られない。



図11-1 阿弥陀三尊千手観音及び不動明王像 長谷寺蔵



図11-2 千手観音像及び童子男行者・大伴孔子古像（赤外線写真）

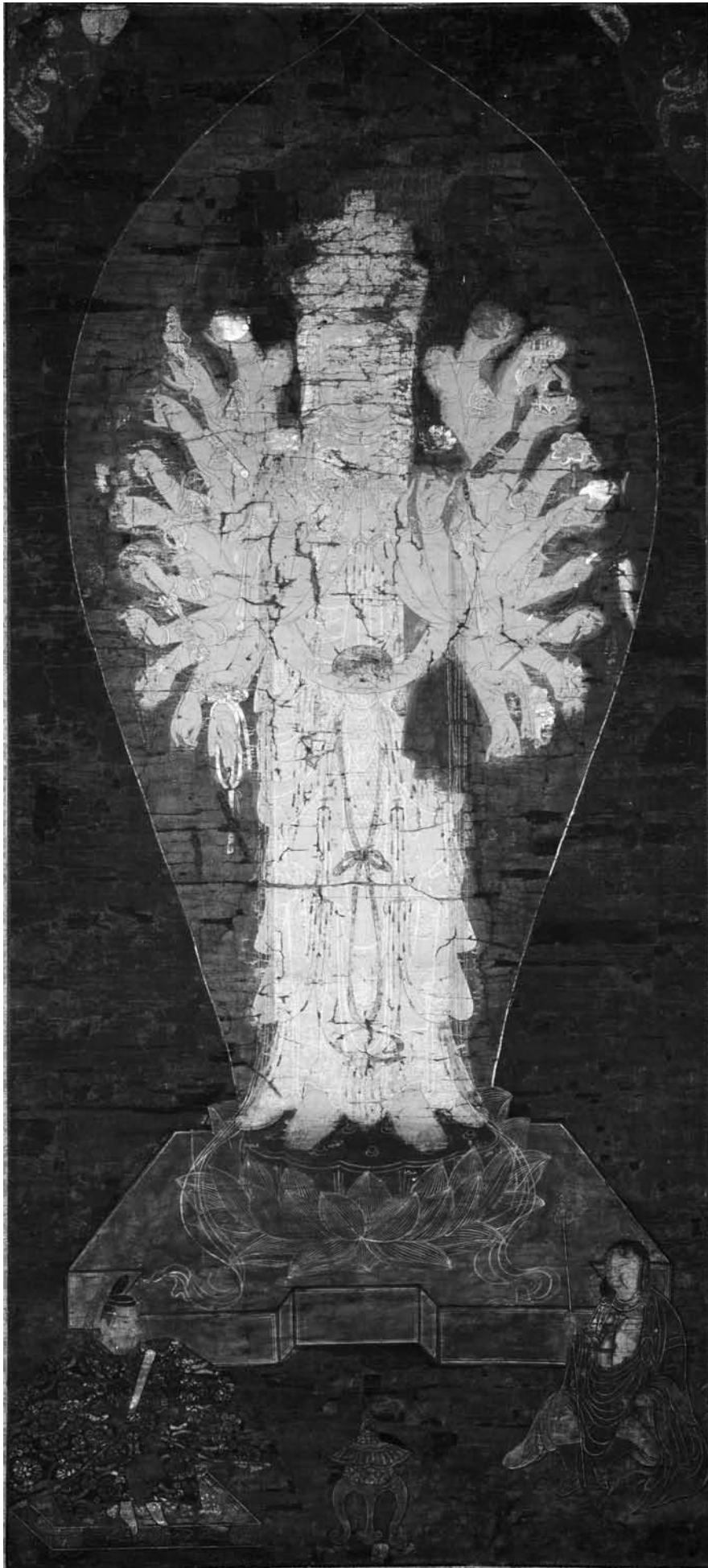


図12-1 千手観音及び童子行者・大伴孔子古像 個人蔵



图12-2 千手觀音像（全身）



图12-4 千手觀音像（鞞付帶）

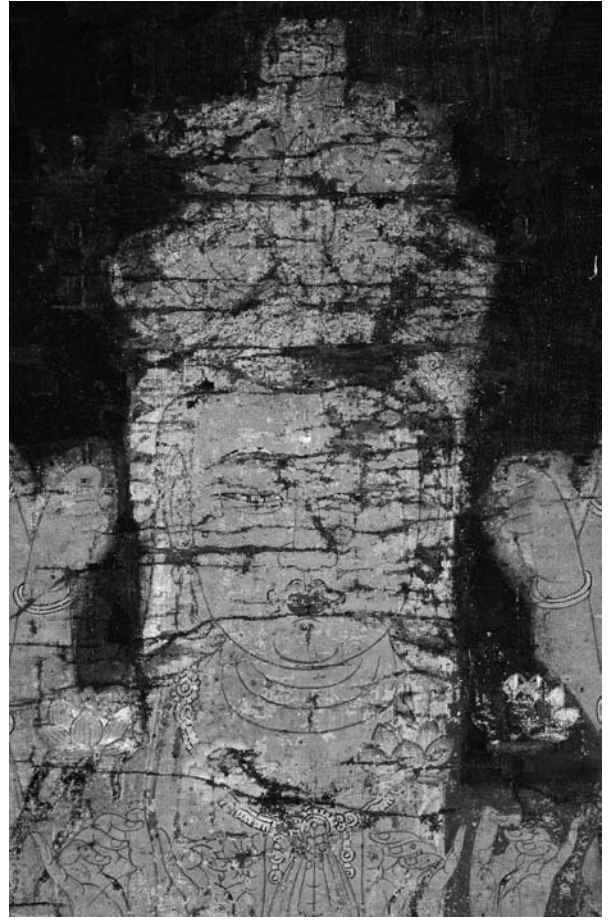


图12-3 千手觀音像（頭部）



图12-6 大伴孔子古像



图12-5 童男行者像



图13-3 童男行者像



图13-4 丹生明神像



图13-1 千手観音及び童男行者・丹生明神像 天桂院蔵

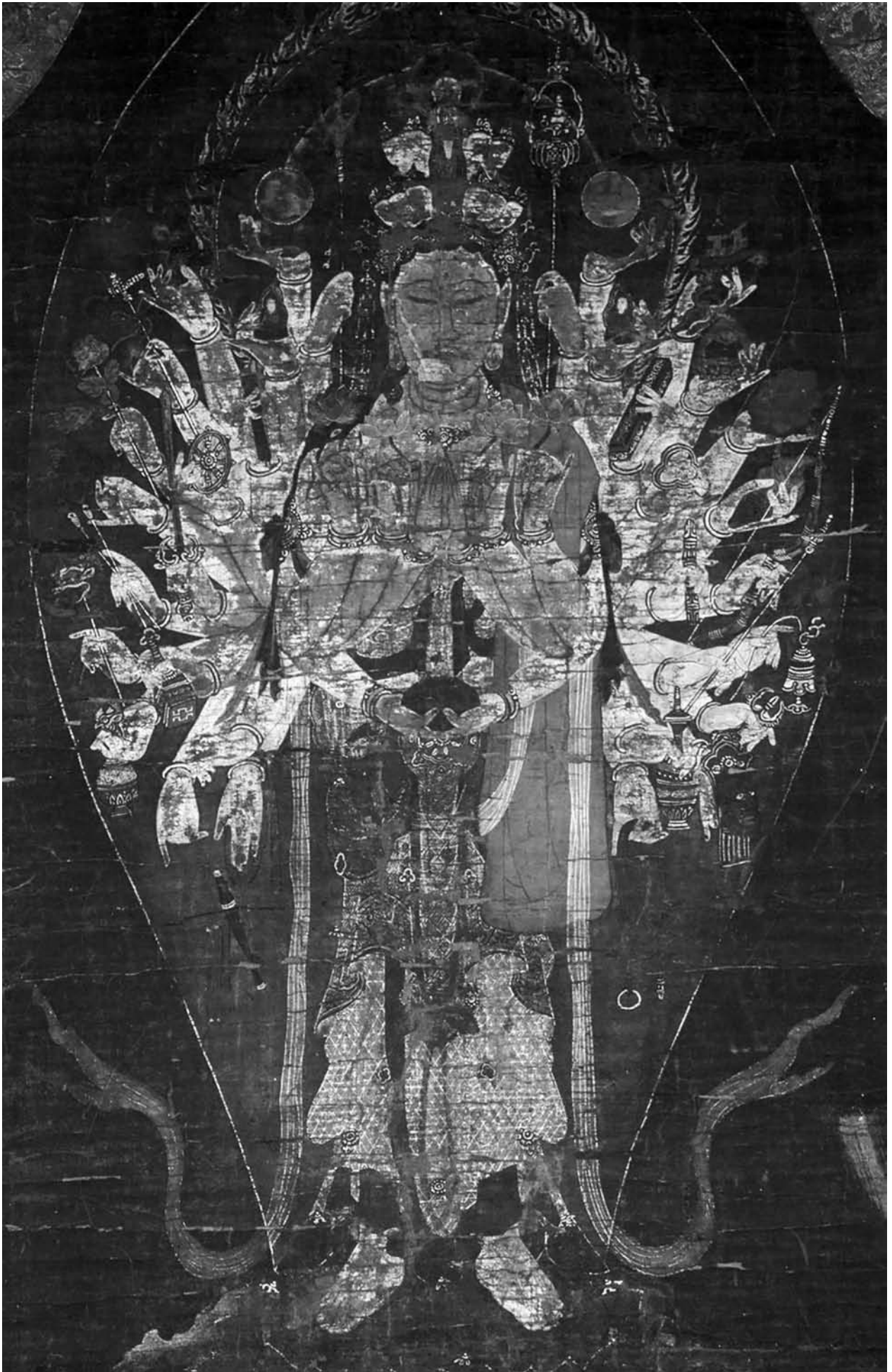


图13-2 千手觀音像 (全身)



图14-1 千手観音及び童子行者・大伴孔子古像 粉河寺蔵

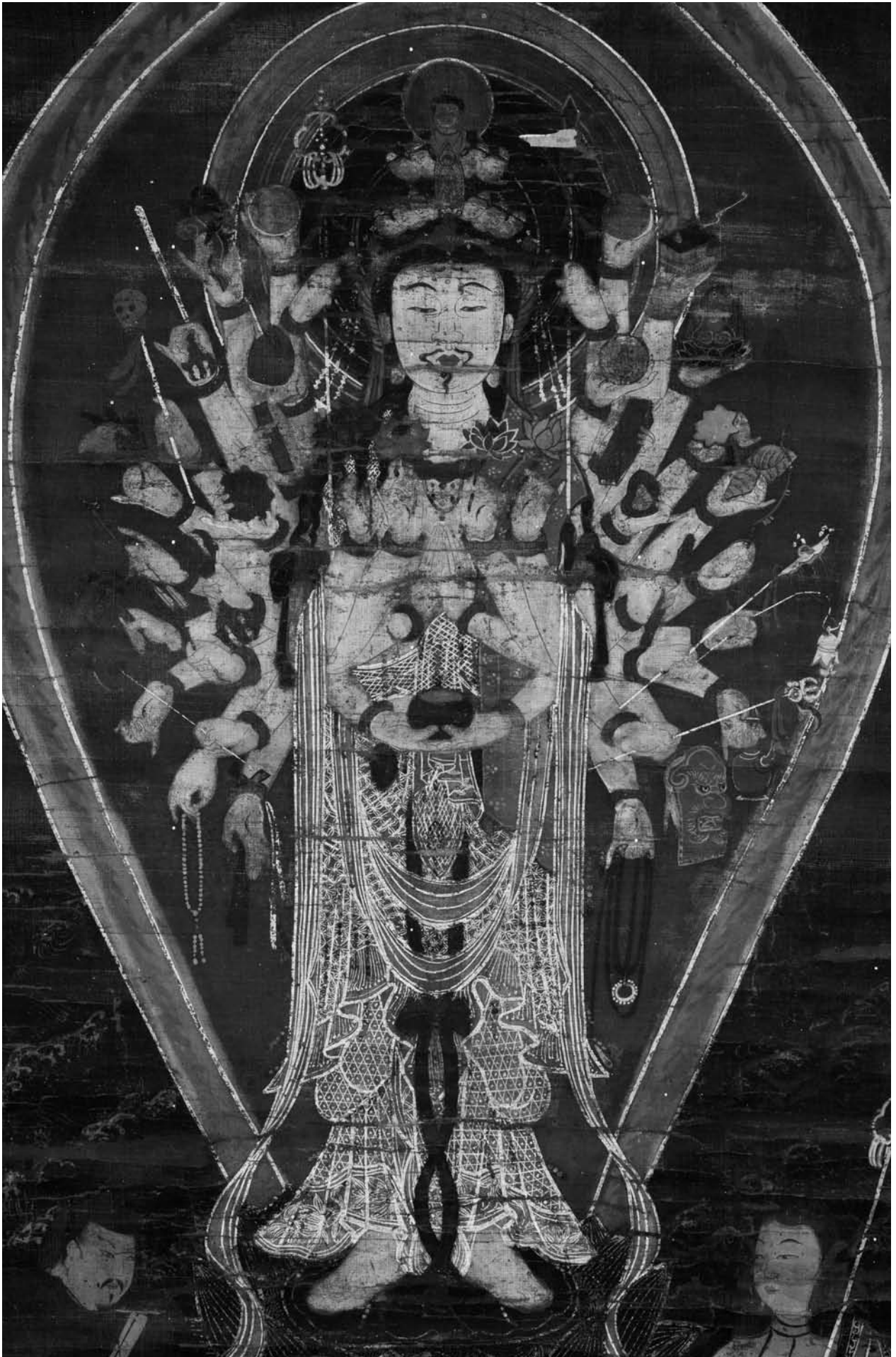


图14-2 千手觀音像 (全身)



图15-2 役行者像



图15-3 丹生明神像



图15-1 千手観音及び童子男行者・大伴孔子古像



图16-1 粉河寺参詣曼荼羅 粉河寺蔵



图16-2 千手觀音像（開帳堂）



图16-3 千手觀音像（御池坊・出現地）

③千手観音及び童男行者・丹生明神像 天桂院（愛知県蒲郡市）蔵（図13）

蒲郡市指定文化財。絹本着色、一幅一鋪とし、縦一一四・〇cm、横三九・五cmを計る。縦長の画面の中央に、鞆付帯を施無畏手に執り、紅袴を左肩に掛けて補陀落山上に立つ千手観音を描く。蓮華手は四臂を表す。上部に帳を配するのも縁起に基づく表現となる。下方中央に大香炉を配し、右下には鈎樟に両足を揃え、大ぶりの錫杖を執って腰掛ける童男行者を描く。それと対面する位置には大伴孔子古ではなく、華麗な宝冠を着けて長い柄の唐扇を手にした唐装女神像を描いている点に粉河寺A本との大きな違いがある。この女神像の特徴的な宝冠と持物は、金剛峯寺弘法大師丹生高野明神像（重要文化財・鎌倉時代）や正智院丹生高野四社明神像（重要文化財・鎌倉時代）の丹生明神像とよく一致しており、丹生明神を表したものと判断される。寺内においては粉河寺鎮守の丹生明神と大伴孔子古を同体とする伝えもあり、制作主体の意図により変更されたものらしい。

千手観音の面部や腕部など金泥の剥落が進み下書きの墨線が露出しているが、裾には截金を精緻に施し、観音の足下の山肌や脇侍周辺の土坡の縁には金泥の隈を施して神聖さを表出する。両脇侍の面部表現にやや固さが見られることなどから、制作時期は南北朝時代（一四世紀）と判断される。

愛知県蒲郡市の天桂院に伝来したもので、巻止には成田左馬助泰高室円通院が寄付し、延宝五年（一六七七）に天桂院住職により修理されたことが記されていると報告される。²¹成田泰高（成田泰親、？一六一七）妻の寄付とのことで、近世前期には天桂院に納められたことが分かるが、それ以前の伝来は不詳。

④千手観音像及び童男行者・大伴孔子古像 粉河寺蔵（図14）

絹本着色、絹継ぎはなく、縦九八・八cm、横四一・五cmを計る。粉河寺伝来のもう一幅の粉河寺式千手観音像である。

白波が立ち岩礁の見える海中に、中央に船光背を背負って蓮台上に立つ千手観音像を描く。施無畏手には鞆付帯を執り、肩に紅袴を掛けて、蓮華手は四臂とする。足下向かって右には左脚を垂下して岩に腰掛ける童男行者を描いて鈎樟は省

略し、左には東帯姿で把笏する大伴孔子古を配する。画面上部に帳をあらわしている。帳のさらに上にあるのは厨子正面の長押とみられる。

中尊肉身は金泥として、着衣に截金を施す。童男行者の袈裟にも金泥を施す。画絹はやや荒く、画風から室町時代後期（一六世紀）ごろの制作とみられる。粉河寺A本にみられた図像の特徴に忠実で、それが室町時代後期まで引き継がれていることを把握できる。付帯情報がなく伝来の詳細は不明だが、前章で確認した宮内省臨時全国宝物取調局による宝物鑑査の情報の中に「在原業平筆と云う所の千手観音」があり、粉河寺A本ないし本像（粉河寺B本）がそれに相当する可能性がある。

⑤千手観音及び童男行者・大伴孔子古像 和歌山県立博物館蔵（図15）

絹本着色、絹継ぎはなく、縦一〇七・二cm、横四一・三cmを計る。

千手観音及び童男行者・大伴孔子古像を中心に、右に役行者、左に丹生明神と称する男神坐像を配した三幅一組の作例のうちの中尊像。

唐草文と一一個の白円を配した舟形光背を背負い蓮台上に立つ千手観音像は、施無畏手に鞆付帯を執り、左肩に紅袴を掛ける。胸前蓮華手は二臂とする。足下向かって右に、大きく描いた鈎樟の根元に座る童男行者を、左に東帯姿の大伴孔子古を描く。画面上方には帳ではなく天蓋が描かれる。粉河寺A本と比べて図像の変容が多くみられる。

本像には役行者像と、丹生明神像と称される貴族男性像が付随する。役行者像は磐座に倚座し、左手に経巻、右手に数珠を執り、左右に前鬼・後鬼を伴う。醜相としない整った風貌の役行者図像を採用する。箱書きに丹生明神と記される像は、巾子冠をつけた東帯姿で笏を執り牀座に座る男性貴族のすがたで、大伴孔子古図像と基本的に変わらない。丹生明神は女神であり、事情を明確にはできないが、先にも確認したとおり丹生明神と大伴孔子古を同体とする寺内の伝承を踏まえれば、両者が重なって信仰された可能性がある。

役行者と、男性貴族姿の丹生明神を伴う粉河観音像は他に類例はないが、ある

いは童行者と役行者、大伴孔子古と丹生明神とを重ねた特殊な三幅対として信仰されたのかもしれない。各幅の画風はわずかに異なるが、制作時期の差はなく、それぞれ中世的な要素を残した桃山〜江戸時代初期（一六〇〜一七世紀）ごろの制作と捉えたい。

各幅の箱蓋に「千手千眼像一幅粉河寺浄土院中」「役行者一幅粉河寺浄土院中」「丹生大明神像一幅粉河寺浄土院中」、箱底に「元禄八乙亥御月吉日表具修補之」、そして三つの箱を入れる外箱の蓋と底にも同様の墨書がある。粉河寺山内、浄土院の什宝で、元禄八年（一六九五）に表具修理を行っており、少なくとも三幅の組み合わせがこれ以前に遡ることが分かる。

⑥粉河寺参詣曼荼羅 粉河寺蔵 (図16)

紙本著色、多数の料紙を貼り継いで本紙を作り、縦一五二・三cm、横一四〇・四cmを計る。粉河寺には甲本（A本）・乙本（B本）の二幅の参詣曼荼羅が所蔵されるが、本図はそのうちより古い一幅で、天正一三年（一五八五）の火災後の制作と推定されている。²²

本堂（金堂・礼堂）をはじめ、粉河寺境内の諸堂舎と縁起に基づく聖地（童行者の出現地・大伴孔子古の距木地・宝鐸地）、風市杜など山外の寺社や村、多数の参詣者を描くなかに、粉河寺式千手観音像が二か所に表される。

一つ目は本堂の左、開帳堂の本尊千手観音像で、舟形光背を背負い蓮台上に立ち、脇手右側一番下に鞆付帯を描き、左肩から右脇腹にかけて条帛の部分に赤色に塗りあらわしており、これが紅袴を表現したものと分かる。

もう一つは御池坊の童行者出現地の池に安置される銅造の千手観音像で、やはり舟形光背を背負い蓮台上に立ち、こちらも施無畏手に鞆付帯を執り、左肩から右脇に掛けて赤色に塗られて紅袴を表している。ともに四臂の蓮華手はあらわさない。帳が表現されないのは、前者では本堂本尊像ではないこと、後者は露頭安置の像であることによるのだろう。

このように粉河寺A本を基準として粉河寺式千手観音像の作例を把握していくと、先の縁起に基づくi〜vの霊験図像だけでなく、頂点が尖って脇手全てを覆う幅広の舟形光背（vi）も挙げた作例全てで共通しており、これも粉河観音の標識として機能していることが理解される。

また千手観音の下方、両脇侍の間の香炉（vii）も鎌倉〜南北朝期の作例（①〜③）に見られるものであり、こうした図像の展開があったことも考慮される。

これらの規範のうち、i・iv・vについては大伴孔子古を丹生明神とする図像（③）や、帳の意味が薄れた事例（⑤）、蓮華手を二臂とする事例（①⑤⑥）があたり程度揺らぎがあるが、ii施無畏手の鞆付帯、iii左肩に掛ける紅袴、vi舟形光背については全ての作例に見られるものであり、これが特に強い規範となっていることを確認しておきたい。

2 図像的特徴が一致しない作例

粉河寺の本尊像を確実に表したことが分かる作例のうち、前項で強調したii・iii・viの特徴を有しないものがある。最後に確認しておきたい。

①三十三所観音曼荼羅図 華嚴寺（岐阜県揖斐川町）蔵 (図17)

重要文化財。絹本著色、画絹は五幅を継いで大画面を作り、本紙の縦一九七・一cm、横一四六・一cmを計る。中央上方に阿弥陀如来を描いた内院を設け、その周囲に山中の景観を背景にして三十三所本尊を上下七段に配置する。諸尊の多数は皆金色として肉身は朱で描き起こす。それぞれの尊容は整って、山水の表現も繊細であり、鎌倉時代後期（一四世紀）の制作と評価されている。

本図は長谷寺を第一番札所とする『寺門高僧伝』行尊巡礼路に基づく配置であり、粉河寺は第四番札所で上段左から二つ目がその本尊像に相当する。舟形光背を表さず頭光だけとし、胸前の蓮華手を二臂とする。脇手のうち施無畏印には持物を執らないが、一方、左脇手の下から二臂目あたりに、通常の千手観音には見

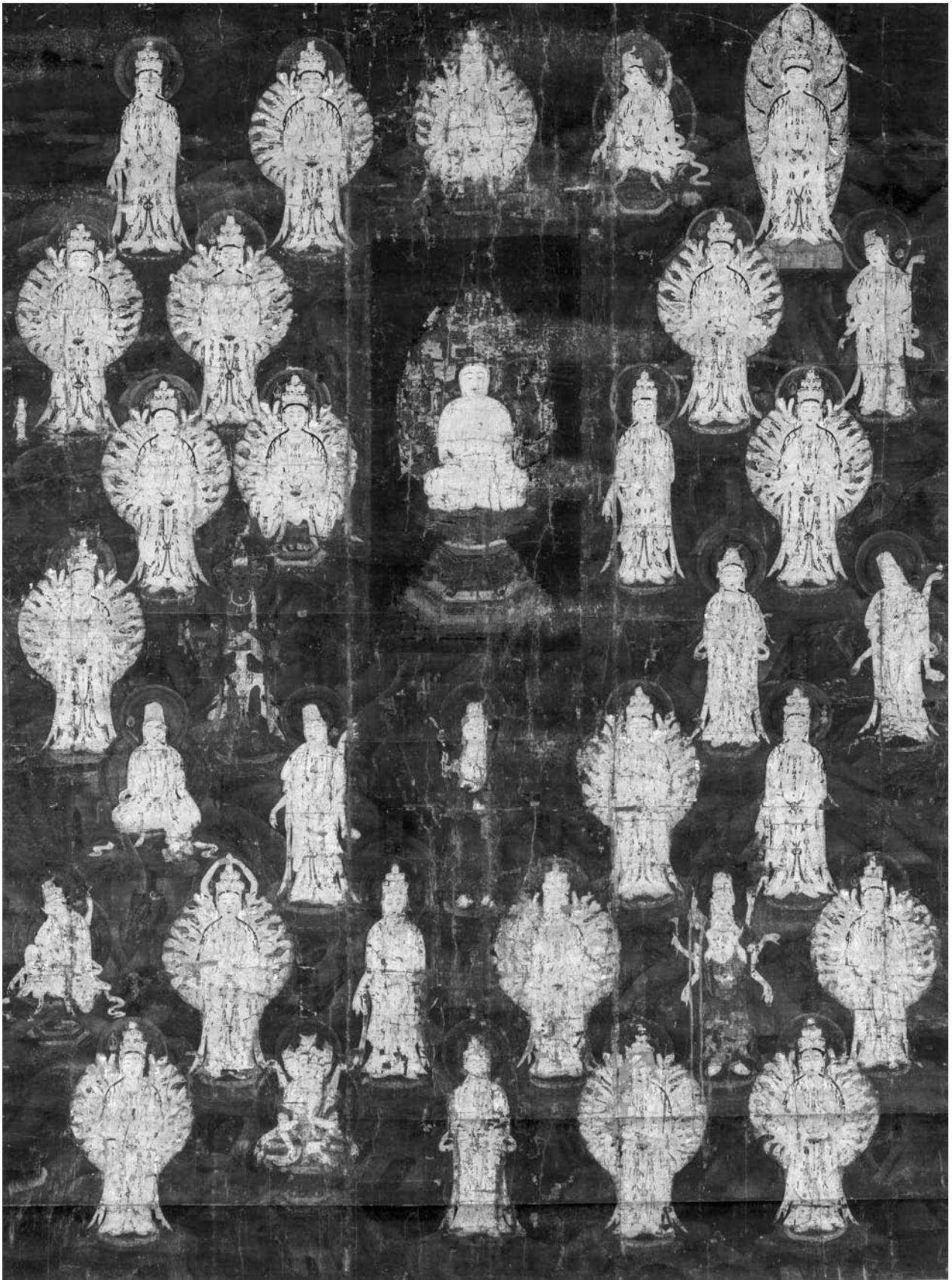


图17-1 三十三所觀音曼荼羅圖 華嚴寺藏



图17-2 粉河寺本尊像

られない赤い布を執っていることを確認できる。粉河観音の紅袴であろう。しかし左肩に紅袴を掛けていないことも含め、本図作者には粉河寺式千手観音の強い規範は全く意識されていない。粉河観音が紅袴を持つという情報のみが認識されていて、それを反映させたものといえそうである。

本図の各霊場本尊図像については石川知彦氏による詳細な分析があり、長谷寺本尊十一面観音像が金剛宝盤石に立って大きな光背を背負って錫杖を執っていること（長谷寺式十一面観音像）や、清水寺本尊千手観音像が脇手のうちの一对を頭上に掲げて化仏を頂いていること（清水寺式千手観音像）にみられるように、霊現像の姿を正確に描きだしたものと、岡寺本尊の二臂如意輪観音を六臂坐像としたり、那智山青岸渡寺本尊の如意輪観音坐像を立像とするなど実際の本尊像とは異なる図像や、また特に表現の差別化のされない画一的な図像が混在していることが指摘される。

そうした中で粉河寺式千手観音像の図像については、長谷寺や清水寺のように正確に認知されていないものの、紅袴の霊験譚のみが鞆付帯の霊験譚を超えて伝播していて、独自の図像として表現されたものと見られる。

②粉河寺縁起 粉河寺蔵（図18）

国宝・粉河寺縁起（以下国宝本と略す）の千手観音図像については、先にこれが粉河寺A本と異なることをすでに指摘した。本稿の最後に再度確認しておきたい。

国宝本は紙本着色、縦三〇・八cm、全長一九八四・二cmを計る。粉河寺本尊千手観音像の出現にまつわる由来と、観音の化身である童行者（童男行者）が長者の娘の病を癒やした霊験譚からなる日本最古の縁起絵巻の一つである。全巻に渡って画面の上下に波のように焼損痕が見られ、特に巻頭部分では詞書を初め欠落も多く、また料紙の錯簡もみられる。一定の視点から眺めつつ堂や屋敷の同じ場面を何度も繰り返し返すあり方は古様で、人物は闊達な筆致で生き生きと描かれて、画風・書風は平安時代末期～鎌倉時代初期、一二世紀末ごろの特徴を示す。

その内容は「漢文縁起」からは大きく改変していて、例えば前半では大伴孔子古の名を示さずただ獵師としたり、千手観音像の出現後に妻や近辺の人々に信仰を広めた場面を追加していることや、後半では河内国渋河郡馬馳市佐大夫の愛子を河内国讃良郡長者の娘へと大胆に変更し、一家がたどり着いた方丈の庵室にてすぐに千手観音像にまみえさせて物語の進行を早め、最後に一家を出家させ、絵では救われた娘が粉河観音のもとで落飾して出家する場面で締め括っている。元の縁起の内容を劇的かつ早い展開の構成に進化させ、物語絵巻としての完成度を高めているといえる。この絵巻を描かせた主体を粉河寺とする説と、寺外、特に後白河法皇とする説があり、あるいはこれを副本と捉えたり、原本を元にした模本とする見解もあり、制作時期を含めて多様な見解が提示されてきた²⁴⁾。

観音図像に着目する。国宝本では前段二回、後段二回の計四回、千手観音像が描かれる。前段①・前段②・後段①・後段②と表記して各像を確認する（図19）。全て光背は頭光のみとする。縁起に基づく霊験図像が像容に反映されるのは後段①・②であるが、前段①・②自体も基本的な千手観音図像との違いがあつて、特に大きいのは前段①・②が胸前の蓮華手と腹前の宝鉢手を表さないことである。この点は後段①・②には表されていて図像の揺らぎがある。前段①と前段②の間でも、日精摩尼手と月精摩尼手が左右入れ替わっており（ただしこれは補彩の可能性もある）、後段①と後段②の間でも脇手の配置が異なっていることなど図像が一定しない。さらには錫杖、宝戟については前段①・②、後段①・②の全てで持たされていない。もちろん四二臂全てを描くような精緻な図像は求められてはいないといえ、最も目立つ錫杖・宝戟の省略は、儀軌よりも像容をすっきりと表現することを優先したということであろう。

国宝本に四度登場する千手観音は全て姿が異なるといえ、この点で国宝本の絵師（複数に及ぶ）は仏画や粉本との整合には拘泥せず、もちろん儀軌にも頓着しない。そうした絵師の性格は後段①・②の霊験図像にも表れていて、既に触れたとおり詞書に「施無畏のお手」と記すにも関わらず、鞆付帯（国宝本では提鞆と呼称を変更）は逆側の絹索手に執らせているのである。

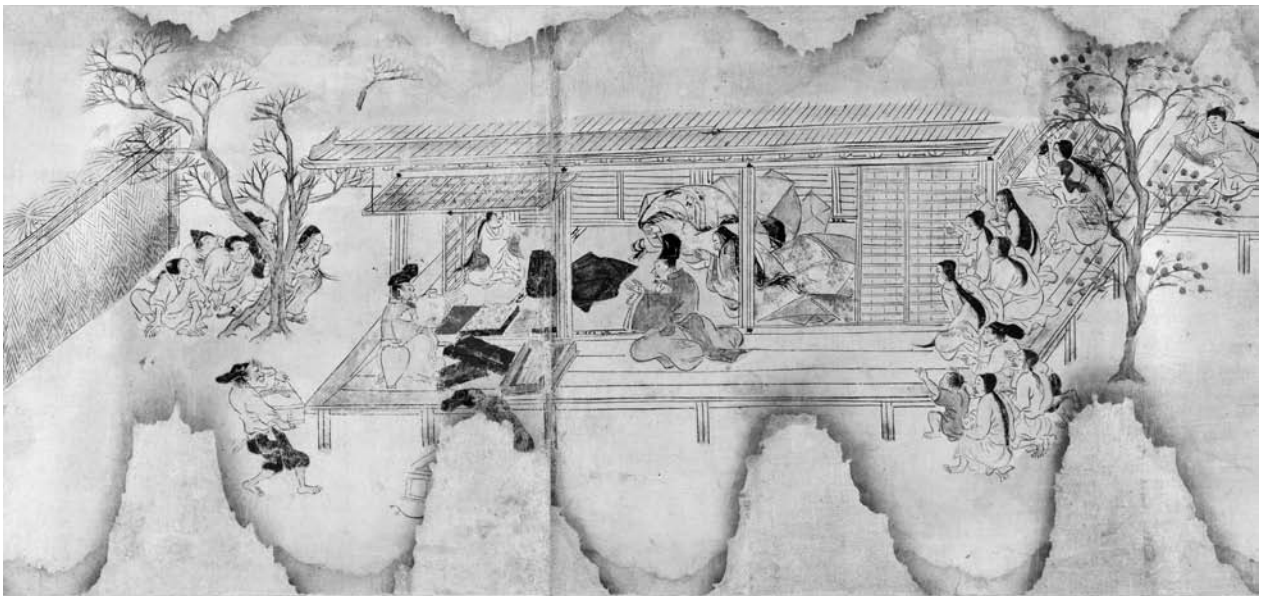


图18 粉河寺縁起 粉河寺蔵



图19-2 前段②（粉河寺縁起（部分）粉河寺蔵）



图19-1 前段①（粉河寺縁起（部分）粉河寺蔵）



图19-4 後段②（粉河寺縁起（部分）粉河寺蔵）



图19-3 後段①（粉河寺縁起（部分）粉河寺蔵）

縁起は寺の由緒と靈験を語り聖地や本尊の聖性を担保する書物である。失われた「流来縁起」以来、寺内で継承されてきた「漢文縁起」を開創者の名さえ省略して大胆に改変するにとどまらず、最も重要な本尊図像も基本的な千手観音の儀軌に即さず一致しないことや、靈験を象徴する鞆付帯も施無畏手に持たせていないわけであり、ここからうかがえるのは、寺家側の立場との径庭である。こうした粉河寺が継承してきた縁起と国宝本の内容の径庭は、そのまま粉河寺と国宝本発願者との間の径庭を示すものといえよう。粉河寺縁起と粉河寺本尊図像について検討してきた本稿の立場からは、国宝本の発願者は粉河寺の外にあったと判断される。

先行研究が明らかにしてきたように、「和文縁起」の「後白河法皇御願之千手堂中尊因縁第二一」において、後白河法皇は粉河寺本尊の残材で刻んだ三尺千手観音像を入手し、安元二年（一一七六）に蓮華王院小千手堂の本尊としたと語る。そこに示される藤原俊経（一一三〇〜九一）が執筆した願文中の縁起内容は改編された国宝本前半部分と一致しており、後白河法皇周辺においてなされた縁起の改編は国宝本にも反映されていて、絵巻の制作もこの一連の事業であったと捉えられる。なお、同様に一〇世紀の資材帳を有し、流布した命蓮説話を大幅に増補して改変が施された信貴山縁起絵巻（国宝・信貴山朝護孫子寺蔵）についても後白河法皇の発願との指摘がなされている。²⁵

最後に、もう一つの靈験図像である紅袴について検討しておく。前節までに明らかにしたように、粉河寺式千手観音像の左肩に掛かる紅袴については「和文縁起」に典拠があったが、この視点を国宝本の紅袴図像にそのまま適用できない。「和文縁起」の成立時期は、縁起中もつとも下限の第二二話に示される天福二年（一一三四）をあまり降らないころと想定され、²⁶ 国宝本の成立時期はそれに先行するためである。

しかし、国宝本と「和文縁起」を時系列に並べて、「漢文縁起」から改編された国宝本における紅袴が、のちに和文縁起の在原業平説話を導いたと考えるのは躊躇される。二章で確認したように、寺内では紅袴のエピソードに国宝本の讃良郡

長者の娘を重ねて語る言説や表象は、近代に至るまで見られない。そもそも国宝本の本文及びその絵が、書写本はもとより、他の縁起や、縁起絵、仏画、仏像などに影響を与えたといえる事例は、中世においては確認することができないのである。²⁷

このようなことから、紅袴伝承は、平安時代末期の段階で先に粉河寺で発生していたものとの仮説を提示したい。国宝本ではこの伝承から業平と北の方の要素を消して紅袴のみを抽出し、長者娘に印象的な情景をまとわせるための改編がなされたと解釈される。²⁸ 時期は降るが華嚴寺三十三所観音曼荼羅にみられたように紅袴伝承は単独で寺外に流布しており、あるいは観音と紅袴という取り合わせは、国宝本の絵詞制作時に絵巻後半の説話内容を大きく改編する上でのインスピレーションの源となった可能性がある。²⁹ 粉河寺における在原業平妻北方紅袴説話の成立と展開の追跡が、今後の国宝本研究の上での一視点となり得ることを指摘しておきたい。

おわりに

本稿では、粉河寺縁起の成立時期とその史料性格に関する新見解を提示した上で、粉河寺縁起（「漢文縁起」「和文縁起」）の内容を踏まえて、鞆付帯を施無畏手に執り、紅袴を肩に掛け、童男行者・大伴孔子古を従え、胸前に四臂の蓮華手をあらわした千手観音像について、粉河寺本尊の靈験を示した粉河寺式千手観音像として位置づけ、その事例を紹介した。さらにそこから派生して、国宝・粉河寺縁起の千手観音図像についても検討し、絵巻制作の主体が寺外にあったことについて私見を述べた。

本稿で示した粉河寺式千手観音像という靈験図像の成立と展開は、そのまま粉河観音信仰の広がりを示すものといえる。粉河寺及びその周辺における地域信仰にとどまらないその実態を解明するための重要な視点となることを最後に指摘し、さらなる事例の把握に努めることとしたい。

- (1) 大河内智之「粉河寺縁起と粉河寺の歴史」(和歌山県立博物館編『国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史』、和歌山県立博物館、二〇一〇)
- (2) 「粉河寺縁起」(漢文縁起)、『統群書類従二十八上』所収
- (3) 「粉河寺大率都婆建立縁起」(藤田常世編『校刊美術史料 寺院編 上巻』「諸寺縁起集」のうち、中央公論美術出版、一九七二)
- (4) 西口順子「紀伊国粉河寺とその縁起」(『史窓』二二、一九六二、同『平安時代の寺院と民衆』、法藏館、二〇〇四に収載)
- (5) 国立国会図書館蔵「延喜天曆保延古文書」のうち。翻刻は『平安遺文』二〇五号、『和歌山県史』古代史料一・平安時代(二)二二号、『かつらぎ町史』古代・中世史料編一九号にあり。
- (6) 和歌山県史編纂委員会編『和歌山県史 原始・古代』(和歌山県、一九九四)二四四頁～二四八頁。
- (7) 「太政官符案」(山本信吉編『正智院文書』、吉川弘文館、二〇〇四)
- (8) 当該期の粉河寺の定額寺院化と縁起進官があったであろうことについては、西口順子「紀伊国粉河寺とその縁起」(注(4)前掲)においてすでに指摘されている。
- (9) 「粉河寺縁起」(和文縁起)、『統群書類従二十八上』所収
- (10) 東野治之「信貴山寺資材宝物帳―翻刻と覚書」(檀原考古学研究所編『檀原考古学研究所論集 第十七』、八木書展古書出版部、二〇一八)
- (11) 山本陽子「粉河寺童男行者信仰小考―フリア美術館蔵伝聖徳太子修業像を中心に―」(『美術史研究』二八、一九九〇)
- (12) 例えば次の展覧会図録の解説では国宝本粉河寺縁起を典拠とみなす。大阪市立美術館編『西国三十三所観音霊場の美術』(大阪市立美術館・毎日新聞社、一九八七)、東武美術館他編『西国三十三所―観音霊場の信仰と美術―』(日本経済新聞社、一九九五)、奈良国立博物館編『西国三十三所―観音霊場の祈りと美―』(奈良国立博物館・名古屋博物館ほか、二〇〇八)、京都国立博物館編『聖地をたずねて―西国三十三所の信仰と至宝―』(読売新聞社、二〇一〇)
- (13) このことについて、河原由雄「粉河寺縁起」の成立とその解釈をめぐる諸問題」(小松茂美編『粉河寺縁起』、日本絵巻物大成5、一九七七)において、紅袴が在原業平説話に基づくことについて触れられている(ただし氏は「和文縁起」成立を契機として国宝本が制作されたとする立場)。
- (14) この帳と業平説話が関連することについては、林温「千手観音と不動明王を伴う阿弥陀三尊来迎像」(『佛教藝術』一八六、一九八六)に指摘がある。
- (15) 高岸輝「粉河観音縁起絵巻」七巻本の成立圏―足利將軍家の絵巻コレクションと南北朝合一前後の紀伊国をめぐる―(和歌山県立博物館編『国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史』、和歌山県立博物館、二〇一〇)
- (16) 「粉河寺旧記」(粉河寺文書のうち)粉河町史編さん委員会編『粉河町史』第三巻(粉河町、一九八八)
- (17) 猪川和子「観音像」(日本の美術一六六、至文堂、一九八〇)。なお本像図版は西国札所会編『西国巡礼 三十三所観音めぐり』(社会思想社、一九七〇)に初めて掲載され(佐和隆研執筆)、浅野清編『西国三十三所令状寺院の総合的研究』(中央公論美術出版、一九九〇)にも収載される。使用写真は全て同じである。
- (18) 竹居明男「日出新聞」記者金子静枝と明治の京都―明治二十一年古美術調査報道記事を中心に―(芸艸堂、二〇一三)
- (19) 林温「千手観音と不動明王を伴う阿弥陀三尊来迎像」(『佛教藝術』一八六、一九八六)
- (20) 元禄一三年(一七〇〇)刊の「粉河寺縁起霊験記」巻頭の「紀州粉河寺千手千眼之図像」に「本願大伴孔子古ノ即鎮守丹生明神」と記される。同資料本文については原田行造「金沢市立図書館蔵本『粉河寺縁起霊験記』―翻刻と解説及び『仮名縁起』との関連について―」(『金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学編)』三二、一九八三)に翻刻される。
- (21) 蒲南市博物館編『蒲南市文化財図録』(蒲南市教育委員会、一九九六)
- (22) 制作年代の判断については、大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』(平凡社、一九八七)、下坂守「参詣曼荼羅」(日本の美術三三二、至文堂、一九九三)、岩鼻通明「粉河寺参詣曼荼羅にみる聖域空間の表現」(足利健亮先生追悼論文集編纂委員会編『地図と歴史空間』、大明堂、二〇〇〇)、大高康正「参詣曼荼羅の研究」(岩田書院、二〇一三)にて共通する。
- (23) 石川知彦「三十三所観音曼荼羅について―華嚴寺本と観音正寺本の図像的諸問題―」(『佛教藝術』一八九、一九九〇)
- (24) 絵巻制作の主体を粉河寺以外、あるいは後白河法皇とする主な論考は次の通り。
梅津次郎「新国宝紹介 粉河寺縁起絵巻」(『MUSEUM』二七、一九五三)
大串純夫「図版要項 粉河寺縁起」(『美術研究』一七一、一九五三)
亀田孜「粉河寺縁起絵巻総考」(『大和文華』二七、一九五八)
清水義明「粉河寺縁起」復元への一考察」(『佛教藝術』八六、一九七二)
梅津次郎「粉河寺縁起絵と吉備大臣入唐絵」(同編『粉河寺縁起絵・吉備大臣入唐絵』新修日本絵巻物全集六、角川書店、一九七七)
- 松原茂「粉河寺縁起」の詞書書風について」(小松茂美編『粉河寺縁起』、日本絵巻物大成5、一九七七)
- 吉田友之「粉河寺縁起絵の背景」(『藝術論究』五、一九七八)
- 塩出貴美子「粉河寺縁起絵巻考―巻頭部の復元をめぐる―」(『文化財学報』二、一九八三)
- 永井久美子「粉河寺縁起絵巻」制作目的考―後白河院小千手堂建立との関係を中心に―(『明月記研究』一一、二〇〇七)
- 山本陽子「粉河寺縁起絵巻」の長者の娘の出家について―縁起絵巻と説話―(高橋亨編『平安文学と隣接諸学10 王朝文学と物語絵』竹林舎、二〇一〇、同『絵巻の図像学―絵そらごと』の表現と発想」(勉誠出版、二〇一三)に収載)
- 山本聡美「粉河寺縁起絵巻」と経説―描かれた罪業・病・救済―(安田政彦編『自然災害と疾病』、竹林舎、二〇一七、同『中世仏教絵画の図像誌―経説絵巻・六道絵・九相図―』(吉川弘文館、二〇一〇)に収載)
- 絵巻制作の主体を粉河寺とする主な論考は次の通り。
片野達郎「粉河寺縁起絵巻絵詞の研究」絵詞の文芸性について」(『文芸研究』二八、一九五八)
西口順子「紀伊国粉河寺とその縁起」(注(4)前掲)
- 河原由雄「粉河寺縁起」の成立とその解釈をめぐる諸問題」(注(13)前掲)
- 井上一稔「粉河寺縁起絵巻」絵詞の成立について」(『博物館学年報』一四、一九八二)
- 亀井若菜「ジェンターの視点が拓く『粉河寺縁起絵巻』―高野山に対抗する自己表象としての絵

巻一」(『ジェンダー史学』一、二〇〇五)

亀井若菜「語り出す絵巻―粉河寺縁起絵巻」『信貴山縁起絵巻』『掃墨物語絵巻』論一(ブリュッ
ケ、二〇一五)

國賀由美子「仏心に目覚めるとき―粉河寺縁起絵巻の説話をめぐって―」(『美術フォーラム21』
三三、二〇一六)

三三、二〇一六)

(25) 谷口耕生「信貴山縁起絵巻」研究序説(奈良国立博物館編『信貴山朝護孫子寺蔵 国宝信貴山
縁起絵巻調査研究報告書―研究・資料編― 奈良国立博物館、二〇二〇)

(26) 片野達郎「粉河寺縁起絵巻絵詞の研究―絵詞の文芸性について」(注(24) 前掲)、西口順子「紀
伊国粉河寺とその縁起」(注(4) 前掲)

(27) 国宝本は、制作から約四〇〇年を経て、ようやく粉河寺内で初めてその存在を確認できる。「粉河
寺旧記」に、元和年間(一六一五―二四)に行われた什物改に際して記録された、御池坊に残る
什物のうち本堂方什物類のなかに「縁起(鳥羽僧正覚猷画/堤中納言定家卿書)」と、それ以前
の伝来の歴史をリセットされて顕れる。その後元禄八年(一六九五)に粉河寺は紀伊藩寺社奉行
に大門再興願を提出し、おそらくその勧進活動の一環として縁起を整理し、元禄十三年(一七〇
〇)、複数の粉河寺縁起を集約した「粉河寺縁起靈験記」を発刊した。その三年後、史上初めて
国宝本を元図として写し、焼損によって欠落した部分を絵・詞ともに復元して首尾を整えた「粉
河寺縁起」(粉河寺蔵)が、後西天皇の第三皇女で円城山靈鑑寺二世の宗栄(一六五八―一七二二)
が詞書を担って制作された。国宝本の絵・詞の残存部分を丁寧に拾い、順序を入れ替え、そして
欠を補いつつも、基本的には「漢文縁起」を最大限に尊重して、その筋立てを国宝本に融合させ
る態度が貫かれている。寺家として当然の態度といえよう。粉河寺大門の完成は宝永四年(一七
〇七)、本堂の建立は享保五年(一七二〇)のことである。国宝本粉河寺縁起は、近世の伽藍復興
の中で、ようやく粉河寺の歴史と融合し始めるといえる。なお、信貴山縁起絵巻についても、寺
内では同様に江戸時代以降の伝来しか追えない(北澤菜月「信貴山縁起絵巻」の伝来をめぐって
―近世におけるその評価と住吉模本の意義―)(奈良国立博物館編『信貴山朝護孫子寺蔵 国宝信
貴山縁起絵巻調査研究報告書―研究・資料編―』注(25) 前掲)。

(28) 片野達郎「粉河寺縁起絵巻絵詞の研究―絵詞の文芸性について」(注(24) 前掲)でも、縁起絵巻
の紅袴について「これは、先の一覧表に示したように、「和文縁起」第三話の故事によって
が、詞が特に「紅の袴」を加えたのは、絵画化された時の視覚的效果を予想してのことと思われ
る。」として、業平説話が縁起絵巻に先行すると捉えている。

(29) 観音と紅袴については、『今昔物語』巻一六「越前国敦賀女、蒙観音利益語第七」に、親を失い零
落した女の元に現れ、その窮状を助けたかつての使用人の娘に与えた紅袴が、持仏堂の観音菩薩
像の肩に引き掛けてあったとする類話がある。

付記 本稿への図版掲載にあたって各所蔵者より格別のご高配を賜った。また掲載図版のうち図1は国
立国会図書館デジタルコレクションより転載し、図11-1は長谷寺(鎌倉市)、図11-2は林温氏、図13
は蒲郡市博物館、図17は大阪市立美術館より提供を受けた。記して謝意を表す。

(当館主任学芸員)